

一凡天下の人の中に、貧賤なりとていやしむべからず、富貴も貧賤も皆天のなせるなり、死生、命あり、富貴天にあり、命なくば富貴もうけまじ、

一不徳にして富貴なれば驕を生ず、必ず其ふうきを保がたし、

一凡人の慈悲心厚く人を憐むを第一とす、又つとめて眞實なるべし、内の誠なく、外の飾を專にする者は、必久しからずして變ず、譬へば紅葉の華やかなるは、忽に色の變するがごとし、一人として萬事に思慮なきは悪し、されど私意有べからず、みな學問によるべし、

右は自いましめ、また己○松平定信、時年十三と同じき童蒙にも告げんとて、明和七のとし睦月の初、武城の側にしるしぬ、

〔丁酉日録〕天保八年三月十六日辰半、淺利九左衛門來訪ひ、其子德操南上後飲酒不羈、少く忠告を乞ふ由を託す、余諾す、十八日朝淺利德操來る、德操南上後飲酒過度、頗る放蕩になりたる故、余○藤田彪屢禁酒の事を勸む、不可、其父之を患ひ、余に又忠告の事を乞、余因て德操を激勵せんと、昨夕德操を訪、不逢、今朝來訪談話の餘、微諷す、不可、更に辨難す、德操怒て不可、余亦憤激至誠を以て之を激す、德操翻然として悛心あるに似たり、余因て相約し、共に禁酒せんと云、德操余が甚飲を嗜む事を熟知せるゆゑ、感激許諾す、期するに三年を以てし、共に一書を以て契とす、嗚呼先君子の門、學問行狀一世に表見するに足る者、先輩には會澤伯民等二三子あり、余が同學年齢の者に至ては、一人の自立する者なし、獨り德操學問は淺しと雖も、人品凡ならず、忠勇群を出づ、余因て深くこれと親むこと二十年一日也、斯舉一は親朋の義を立、因て以自激勵せんと欲するなり、

〔先哲叢談五〕淺見安正、初名順良、小字重次郎、號綱齋、又號望楠樓、近江人、

綱齋兼好武事、常騎馬擊劍、其所帶劍鐔、鐫觀瀾篆赤心報國四字、

〔薩藩舊傳集〕一久保七兵衛殿差刀の中子に、刻付有之候は、表に、